

■ 大王墓特有の八角墳と確定 石室内部に精巧な加工と朱塗り ■ 奈良・中尾山古墳 文武天皇陵の可能性高まる新発見 ～ 関大考古学研究室と明日香村教育委員会による古墳発掘調査 ～

このたび関西大学文学部考古学研究室と奈良県明日香村教育委員会は、明日香村の中尾山古墳の発掘調査を行い、古墳の大きさを正確に把握するとともに、精巧な加工技術と朱塗りが施された石槨内部の構造を明らかにしました。以下、本文は、2020年11月26日に実施した共同記者発表での報告内容です。

本件の ポイント

- ・中尾山古墳が文武天皇の陵墓である可能性を高める歴史的発見
- ・石槨内部の堅牢な石材を磨き上げた荘厳な造りから、埋葬された被葬者の権威の高さがうかがえる
- ・関西大学考古学研究室と奈良県明日香村教育委員会による共同の古墳発掘調査

今回の歴史的発見につながった調査は、現在、県や市が連携して登録を目指す「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の構成資産である、中尾山古墳の段丘規模や構造などの全貌を解明することを目的に、2020年9月から開始した調査です。

奈良県高市郡明日香村にある中尾山古墳は、7世紀末から8世紀初頭に築造された終末期古墳です。1974年の環境整備に伴う調査で、八角形の墳丘内部に蔵骨器を納める横口式石槨を備えたものであることが推定されており、今回の本格的な調査でそれが確定されました。

調査結果によると、中央部の墳丘は高さ5m以上、対辺長約19.5mの3段構造。その外側に3重の石敷きが見つけられました。内部は火葬した被葬者の遺骨を入れる石室が10個の巨石で構築。石の表面は当時では珍しい研磨技術で磨かれ、同様の石室は他の古墳では見つかっていません。また、約0.9m四方の石室内部はすべて水銀朱で塗られていたことも確認されました。

関西大学文学部の米田文孝教授らによると、使用された石材の総重量は約560t、その築造には約2万人の労働者が従事したと推定しました。これは極彩色の壁画で有名な高松塚古墳の4倍に相当。石室内部の加工度合いや天皇陵に特有の八角墳であることなどから、中尾山古墳の被葬者は天皇かそれに準ずる立場の人物であることがうかがえます。

26日の会見で山本秀樹副学長は、「考古学的な研究だけでなく、明日香村がすすめる世界遺産登録申請や、まちづくりにも全力で取り組みたい」と話しました。また、森川裕一明日香村村長は、「豊かな文化遺産を生かし、星野リゾートさんを誘致するなど、村をまるごと博物館化する計画を関西大学と一緒に進めていきたい」と述べました。

■ 関西大学と明日香村

関西大学と明日香村は、1972年に網干善教名誉教授らによる高松塚発掘で緊密に連携するようになり、1975年に共同で「飛鳥史学文学講座」を始めて以来、これまで500回以上開催。2006年には地域連携協定を結び、本年9月「学術・文化交流に関する覚書」を締結している。

なお、12月13日(日)13時から明日香村立中央公民館で開かれる同講座で、今回の発掘を担当した明日香村教育委員会文化財課の西光慎治博士〔文学〕が特別講演します。

▼同講座の詳細は[関西大学教育後援会ウェブサイト](#)をご参照ください。

※講座受講に関するお問い合わせは、教育後援会事務局まで (TEL: 06-6368-0055 受付: 9時～17時)



<発掘調査に携わる考古学研究室の学生>

この件に関するお問い合わせ先

関西大学 総合企画室 広報課 担当: 寺崎、木田

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 Tel.06-6368-0201 Fax.06-6368-1266

www.kansai-u.ac.jp